

## 三ガク都 松本の「シンカ」



総合計画は、自治体にとって、constitution即ち憲法に当たるものだと思っています。10年に一度、来し方行く末を問い直し、まちの方向性を指し示す、根本規範であり、原理原則です。

今回は、市民と行政がプロセスと中身を共有し、それぞれの「行動」につながる総合計画を作り上げることを目指しました。21人のメンバーで構成する「市民会議」を立ち上げ、松本市の課題と展望を根本から掘り起こす議論をお願いしました。

市民会議が、松本を象徴し未来への道標として選んだ言葉が、『三ガク都』です。慣れ親しんではいるものの、少し片隅に追いやっていたかもしれない、「岳都」「楽都」「学都」。市民が誇りを感じる3つの特長≡ポテンシャルを、時代に即して磨き上げていくことが、総合計画の中核となりました。

時代は、大きな転換期を迎えています。デジタル化とゼロカーボンという新しい世界基準が、経済や社会の仕組みを根底から変えようとしています。そのタイミングで、私たちはコロナショックと対峙しました。今こそ、先人から受け継いできた進取の気性を発揮し、臆することなく変革に乗り出すときです。

日本全体の人口減少が加速していく中で、松本市は、脱東京一極集中の流れをつかみ、将来にわたって24万程度の人口を維持する「人口の定常化」を目標に掲げました。自然環境や歴史文化の地域特性を最大限に活かした循環型社会をつくっていきます。

2030年に世界はどう変わっているのか、誰も正確に見通すことはできません。私たちは、一人ひとりが豊かさや幸せを実感できるまちを目指して、しなやかに、したたかに、松本の「シンカ」に挑み続けます。

令和3年8月

松本市長 臥雲 義尚

I

はじめに



# 1 総合計画とは

総合計画は、総合的かつ計画的に市政運営を行っていくために、まちづくりの方針を定め、目指すまちの姿やまちづくりの方向性などを市民の皆さんと共有するものです。また、本市において策定するすべての計画の基本となるものであり、分野別の個別計画の策定にあたっては、総合計画との整合性が図られることとなっています。

# 2 計画の構成

総合計画は、「基本構想」、「基本計画」及び「実施計画」で構成されています。

## 基本構想

まちづくりの基本理念や目指すまちの姿を定めるもので、市政運営の指針となるものです。

## 基本計画

基本構想に掲げる基本理念や目指すまちの姿を実現するための、具体的な政策の方向性や基本施策を体系的に示すものです。

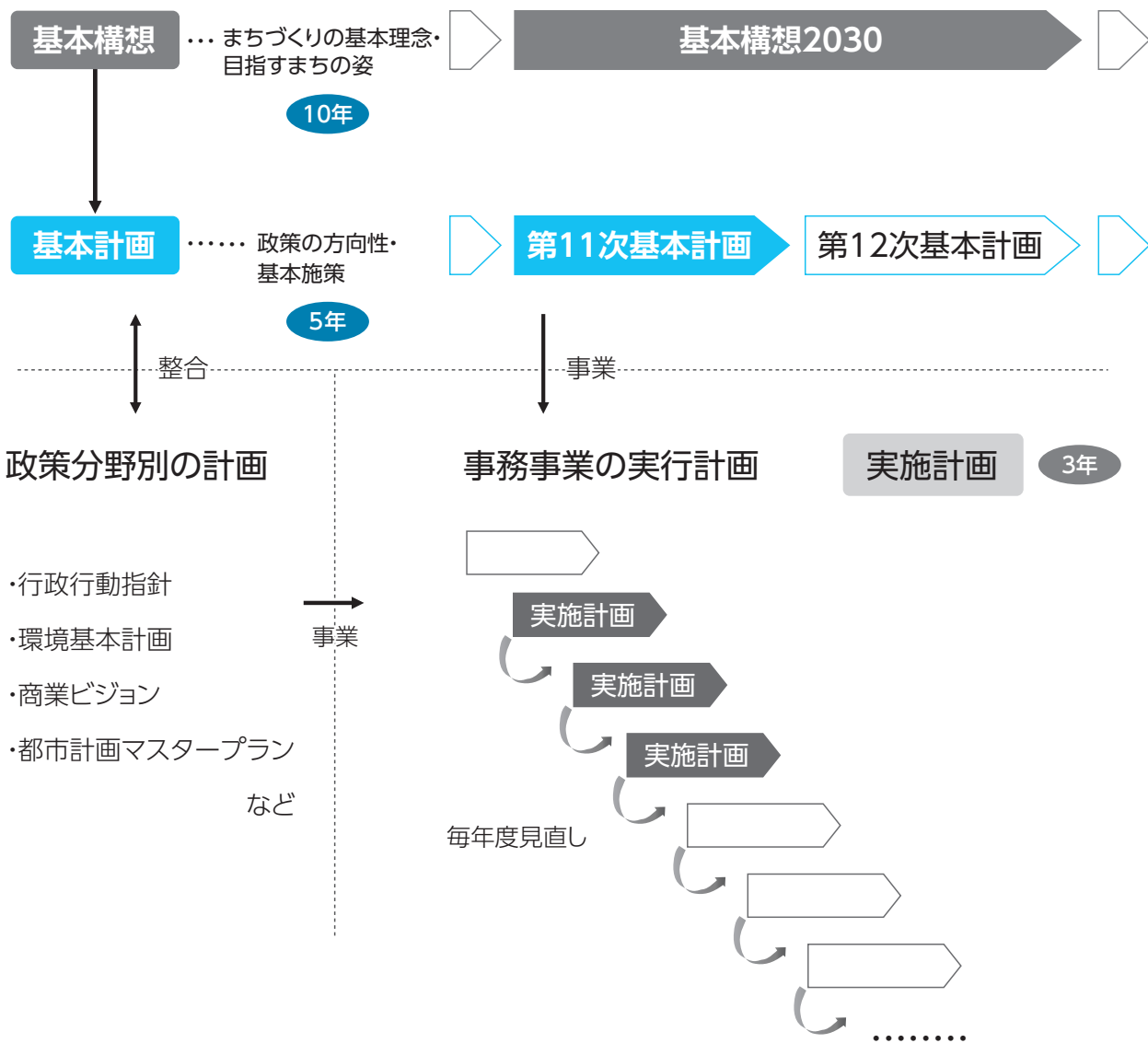
## 実施計画

基本計画に掲げた政策の方向性や基本施策に基づく、具体的な事務事業の実行計画となるものです。

なお、実施計画については、ローリング方式により毎年度見直しを行いながら策定することから別に提示します。

# 総合計画

2021 → 2030 →





### 3 計画策定の前提となる社会背景

#### 時代の大きな転換期

新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい、人々の生活や社会経済活動を一変させるなど、時代は今、100年もしくは200年に一度の大きな転換期を迎えていると言われています。また、今後も引き続き不確実かつ曖昧な状況が続くと考えられる中、様々な事態に臨機応変に対応できることが求められています。

ニューノーマルという言葉に代表されるように、これまで「当たり前」と考えていた仕組みや日常は、見直しを余儀なくされています。こうした転換期をチャンスと捉え、松本らしさを大切にしながら変革に取り組んでいきます。

#### 加速する少子化・高齢化・人口減少

日本の人口は、2008年をピークに減少に転じ、国立社会保障・人口問題研究所の将来推計によると、2050年の日本の人口は1億人を下回り、15歳から64歳の生産年齢人口は、総人口の50パーセント程度にまで減少する一方、65歳以上の高齢化率は40%近くに達すると予測されています。

松本市においても、この傾向は避けて通れない状況であり、あらゆる政策を総動員することにより少子化に歯止めをかけ、移住・定住や関係人口の増加に努めるとともに、今後待ち受ける超高齢化時代に向けて、持続可能で活力のあるまちづくりを進めていきます。

#### 脱炭素社会への移行

地球温暖化による気候変動をはじめとする環境問題は、世界的な危機として認識され、脱炭素社会への移行が進んでいます。

松本市は、2020年12月に松本市気候非常事態宣言を行い、再生可能エネルギーの活用をはじめとする2050年ゼロカーボンシティを目指した取組みを表明しました。この宣言のもと、市民・事業者・行政が危機意識を共有し、連携して取組みを進め、豊かな自然環境に磨きをかけて、次の世代へ引き継いでいきます。

#### 暮らしのデジタル化

情報通信技術の飛躍的な進歩に伴い、インターネットやスマートフォンに代表されるデジタルツールは、私たちの生活に無くてはならないものとなり、DX（デジタルトランスフォーメーション）という言葉が日常的に耳にするようになるなど、暮らしのデジタル化が急速に進んでいます。そのような中、これまでも日本のデジタル化は立ち遅れていると指摘されていましたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、改めてその事実が浮き彫りになりました。

松本市においても、デジタル化の立ち遅れは最も優先すべき課題です。地域経済の競争力を高め、暮らしやすい地域生活を牽引していくために、行政や社会のデジタル化を加速していきます。

## 激甚化する自然災害

近年、日本各地で地震や豪雨などによる大規模な自然災害が相次ぎ、甚大な被害が発生しています。

松本市においても、従来から「糸魚川―静岡構造線断層帯」を震源とする大規模地震の発生等が危惧されています。市民の生命と財産を守り、誰もが安全・安心に暮らしていくために、起きてはならない最悪の事態を想定する中で、市民一人ひとりの意識をより一層高め、災害に強いまちづくりを進めていきます。

## 脱東京一極集中

住民に身近な行政サービスは、できるだけ住民に身近な基礎自治体が担うという考えのもと、地方分権改革が進められる中、ポストコロナを見据えた脱東京一極集中の流れと相まって、「自律×分散×協調」型社会を実現する地方都市の重要性が高まっています。

松本市は、平成30年に中枢中核都市として指定を受けるとともに、令和3年4月には中核市としてのスタートを切りました。これからは、より自律的かつ主体的なまちづくりを進めることに加え、周辺市町村と協調した取組みを強化することにより、地域の発展をリードしていきます。

## 価値観やライフスタイルの多様化

社会の成熟に伴い、人々の価値観やライフスタイルが変化し、人々のニーズも多様化する中、画一的な行政サービスだけでは対応することが困難になってきています。そのような中、地域コミュニティの役割が重要性を増していますが、価値観やライフスタイルの変化は、地域で「助け合う」といった共助に対する意識の希薄化を招き、大きな問題となっています。

松本市は、「地域」が基盤という考えのもと全地区に地域づくりセンターを設置するなど、地域の課題を地域住民が主体となって解決する仕組みづくりを進めてきました。一方で、町会の加入率は低下傾向が続き、役員の高齢化や担い手不足が深刻化していることから、住民自治支援を強化するなど、時代に即した地域づくりに取り組んでいきます。



## 4 計画策定の視点

### 市民に身近で、分かりやすい計画とします

総合計画は、行政にとって市政運営の指針であるとともに、まちづくりの方向性などを市民と共有するためのものです。市民の目線に立ち、市民主体の計画作りを進めるとともに、できるだけシンプルな構成や表記とすることで、市民に身近で、分かりやすい計画とします。

### 具体的な行動に繋がる計画とします

まちづくりの主役は、市民一人ひとりであり、それぞれが重要な役割を担っています。また、様々な困難に立ち向かい大きな変革を成し遂げるには、一人ひとりの意識や行動が何よりも重要です。市民と行政が目的を共有し、具体的な行動に繋がる計画とします。

### 組織や分野を超えて取り組む計画とします

計画の体系にはじまり、施策の実施に至るまで、行政の計画は、総合計画を頂点としたピラミッド型の構造となっています。こうした構造は、総合的かつ計画的に行政運営を行っていくために、必要不可欠なものです。一方、行政の縦割りを招く一因ともなりかねません。そうした意識のもと、組織や分野を超えて横断的に取り組むことのできる計画とします。

### SDGsの達成に寄与する計画とします

2015年9月の国連サミットにおいて全会一致で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）は、国際社会の共通目標です。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のあるまちの実現に向け、SDGsが掲げる17の目標に沿った施策を推進し、経済・社会・環境を巡る広範な課題に統合的に取り組むことにより、SDGsの達成に寄与する計画とします。

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



## 5 松本市の特性

### 位置・面積

本市は、長野県のほぼ中央から西部に位置し、北は安曇野市、南は塩尻市、東は上田市、西は岐阜県高山市などと接しています。東西概ね52km、南北概ね41kmにわたり、面積は、978.47km<sup>2</sup>で県内最大の面積を有しています。

【面積】	978.47km <sup>2</sup>
【標高】	592.21m
【北緯】	36度14分17秒
【東経】	137度58分19秒
	(基準 松本市役所)

### 地勢

市の東部には、標高2,000mの美ヶ原高原を望み、西部には標高3,000m級の峰々が連なる北アルプスの山岳が広がります。標高最高地点は3,190mの奥穂高岳、市中心部との標高差は約2,600mもあります。日本の屋根と言われる山岳地帯から松本平と呼ばれる肥沃な盆地まで、変化と魅力に富んだ多彩な地勢が形成されています。

市内には梓川が貫流し、上流域は北アルプスの山岳地帯にあって起伏の多い急峻な地形となっており、中流域は山麓地帯と河岸段丘が広がり、下流域は多くの河川からなる扇状地が形成されています。また北部には、周囲を山に囲まれた中に、山麓からの河川に沿って耕地が開けている地域があります。

### 四季

気候は、日較差の大きい典型的な内陸性気候です。湿度が低く、さわやかな空気と澄みわたった空、長い日照時間に恵まれています。標高の高い上高地や乗鞍高原、野麦峠、美ヶ原高原などでは冬季の積雪量も多く、厳しい寒さとなります。

### 沿革

平安時代には、信濃国府が松本の地に置かれていました。中世には信濃守護の館の所在地として、また江戸時代には松本藩の城下町として栄えました。

明治40年5月1日に市制を施行し、平成19年、市制施行100周年を迎えました。

明治期からは製糸業を中心とした近代産業が勃興し、大正初年には日本銀行松本支店が開業されるなど、長野県の経済金融の中心地となりました。近代工業化は第二次世界大戦中の工場疎開に端を発し、さらに昭和39年の内陸唯一の新産業都市の指定が契機となって、電気・機械・食





料品等の業種を中心に発展してきました。近年は、産業基盤の確立と地域経済発展のため、知的集約型企業の拠点として建設した新工業団地を中心に、更なる産業集積が進んでいます。

商業は江戸時代から『商都松本』とも称されてきたとおり、中南信の商圏の中心として、大きな商業集積を形成してきました。農業は、昭和30年代までは、専業農家を中心に稲作、畑作、養蚕、酪農などが行われ、その後の高度経済成長期からは、農業従事者の他産業への流出、兼業化などが顕著となり、農家戸数は減少していますが、近年では、気象条件を生かした高品質の野菜、果樹、花きの生産が増加しています。

高速交通網は、平成5年に長野自動車道が全線開通し、平成9年には、北陸地方への通年通行が可能な安房トンネルが開通しました。現在は中部縦貫自動車道（松本波田道路）の事業化が進められています。また、長野県唯一の空の玄関口、信州まつもと空港は、令和元年にジェット化25周年を迎えるとともに、県による国際化、機能拡充が図られています。

伝統的に教育や文化を重んずる気風があり、明治初年の開智学校の開校に始まり、大正期には松本高等学校（旧制）が招致されました。戦後はスズキ・メソッド、花いっぱい運動が発祥し、平成4年からは小澤征爾マエストロのセイジ・オザワ松本フェスティバルが毎年開催されています。平成25年には、健康寿命延伸都市宣言を行い、市民一人ひとりの命と暮らしを尊重するまちづくりを進めています。

地方分権を推進するため、平成12年には特例市の指定を受け、その後は施行時特例市として、周辺市村と連携を図りながら、個性豊かな持続可能なまちづくりに取り組んできました。

平成17年4月に近隣の四賀村・安曇村・奈川村・梓川村と、さらに平成22年3月には波田町と合併し、全市一体的な市政運営を進めています。

平成26年度には、市内全35地区に、地域を基盤に、それぞれの地域課題を解決していくため、地域づくりセンターを設置しました。

令和3年4月、中核市に移行し、県から多くの権限を受ける中、地域を牽引する都市として、新たなスタートを切りました。

## 松本らしさを象徴する「岳都、楽都、学都」 三ガク都

- 3,000m級の峰々が連なる日本アルプスを擁し、多くのアルピニストを迎える **岳都・松本**
- バイオリンの調べやセイジ・オザワ 松本フェスティバルに代表される **楽都・松本**
- 古くから学問を尊ぶ進取の気質あふれる **学都・松本**